

平城宮才12·13次發掘調査概報.

奈良國立文化財研究所

平城宮才12・13次発掘調査概報

特別史跡「平城宮跡」の才12次調査は、今年度当初から、現園有地の北端にある轟感調査事務所の西面方、約20アール（6AAB-1-B-D-F地区）で行い、ひきつうき才13次調査を、通称一系通りの北方約60アール（6AAB-ii, 5AAC-C-D-F-H-L-K-V地区）で行なつた。以下その結果を記述する。

(1) 才12次調査

この辺縁は、才2次内裏南東部に接し、検出された主な遺物は、遺物2種、圓筒2個、構2片であつて、これらが少なくてとも多面に存在つて造形されてゐる。

才2次内裏以朝の遺構としては、調査把感頭部に東西方向の柱間（柱間各3m）がある。この構は独立柱回廊（SII-247）と重複しており、圓筒よりも古い隋朝のものである。この構の東・西限は示されなかつたが、今回の調査では、4間分を検出した。才2次内裏の遺構としては、梁地回廊1、独立柱回廊1、走場1があつた。調査で山牆で検出された東西方向の板瓦岩瓦踏溝は、内裏内筋を隔てる南面北側回廊の北邊前踏溝である。前述検出した内裏正殿の東南建物（SB440）の南3mをへてて、南北にならぶ今幅×2間の南北棟（柱間各3m）は、正殿の東南建物や、獨立柱回廊と、それより柱並みがそろう。この東にある南北方向の独立柱回廊（SC247）（柱間各3m）は、南面梁地回廊に接続し、内裏内筋前面中起部を構築している。今回13間分と検出し、これで独立柱回廊は南北22間の全規模を知ることができた。この回廊の東西の雨落溝は系溝のものであるが、梁地回廊北雨落溝との接合部分にのみ凝灰岩切石が用いらされている。

才2次内裏以後に造営された遺構としては、独立柱回廊の東柱列に重複する南北方向の掘立柱回廊（SA248）と、内裏正殿の南に並んで検出した建物（SB447）がある。柵列（柱間各3m）は今回12間分、前回までの調査と合せて17間を確認したが、南限は未確定で

ある。正殿の廟の建物は9間×4段東西棟（柱間各3m）獨立柱建物で、その規模は前回の調査で判明していたが、今回廊柱柱の柱2.8mに柱通りのセララ小柱穴列を検出した。この建物と列は柱通りがそろい、同一時期の造営によるものと認められる。

このほかに平城宮以前の遺構として、神明許古墳（S3.214）の後円部西側周濠を検出した。

塗壁は以上のようであるが、遺跡は小塗で、これまでの調査と同様の風が多かった。

車塗柱の柱2次軒裏間に独立柱回廊にかこまれて西側中に帝室、車塗柱軒とよく似ていることは、これまでの調査でも立ちかどれる。正殿（S3.450）は平安宮の類廣殿・正殿東南の最初（S3.440）には、その正殿殿の跡にあたるものと考えらるが、今回新たに発見した半間×2間も、また平城宮の軒穴間にあたるものとみうことができる。

（2）第13次調査

この調査は第2次内裏の東北部で、第11次調査北端の東方にあたる。遺跡について、記述の順序上、東半部（6AAB-u, 6AA0-c, 6AA0-d北）と西半部（6AA0-b, H.I.K.V北区）に分けて報告する。

（1）東半部

東半部で検出した主な遺構は、建物11棟、窓地一面、井戸1基、礎石1基、土塙2、煙跡2基などである。これらの遺構には、少なくとも全國にわたる遺跡が詰められる。建物は6AA0-D地区北端の小籠石を用いた1棟を除くほかは、すべて獨立柱のものであった。なお6AAB-u地区では、完山が付いたため、全城に盛土を行ひ、その上にすべての遺構を造営している。

〔A期〕

6AAB-u地区中央北部で、東妻柱と南側柱を検出した東西方向ア曲建物（柱間各3m）がある。H地区西北隅にあるもう約3間の土塙もこの期に屬し、これから多數出土した木簡の中に天平19年銘を有するものがあつて、この土塙の埋没期を天平末年に求めることば

できる。

〔B期〕

この階期に最大規模の造営が行なわれ、建物3棟と墓地一面が造営される。II地区東方で検出した南北方向の建物は、梁間2間、桁行6間以上の身舎の東西両面に附がつき（柱間各3.0m）この地区で最も大きほ規模のものであろう。この建物の南側11間に、この建物の東側柱列と東壁をそろえて建てられる東西方向2間の建物（柱間各2.6m）、南半部が末確認である。II地区西南部には、東西方向3間、南北方向2間（柱間各2.4m）の東西棟建物があり、この南側柱列と、前記の2間東西棟建物の北側柱列がそろう。II地区東端を南北に走る墓地は、基礎地形として堅地石を約50cm掘りさげて、その上に黄褐色粘土層土を積みあげたもので、東端は後古破壊されていて、基礎地形等の現在幅は北端で約1.5m残っている。この上には東西向2間の軒間に、南北方向2列の掘立柱小穴があり、これは墓地構築の際に造営に専した柱穴であろう。

〔C期〕

II地区西北部で南北2向以上、東西2間（柱間各3.0m）の南北棟建物を検出した。この建物はA期の土基埋土の上に建てられている。

〔D期〕

II地区中央北寄りに、東西方向6間、南北方向4間の東西棟建物がある。この建物は4間×2間（柱間各2.4m）の身舎の四面に附がつく。

このほかにII地区東南部の5間×1間以上東西棟（柱間各2.4m）、中央部の北端のつく5間×3間東西棟（柱間各2.4m）、西面部の2間以上×2間の南北棟（柱間各3.0m）、6AAO-C地区の5間×2間南北棟（柱間各2.4m）、6AAO-D地区3間×2間南北棟（柱間各2.4m）などの建物があるが造営期が明らかでない。またもAAO-C地区の東西方向の溝、6AAO-D地区北方の溝、6AAO-D地区中央部にある土塁についても造営期は不明である。この土塁から木簡が39出土した。

6AAB-H 地区東部にあら井戸は出土遺物からみて鹿苑期と平城上皇の時期に推定される。なおり地区中央部北端で、平面が長方形の焼成窯を検出した。この焼成窯は A 期以前に作られており、また平城宮造営以前の遺構として、6AAO-D 地区南部で、市庭古墳東側濠東岸の一部を検出した。

以上の4面にわたる監營期のうち、B 期はそれ以前に用いられたと思われる既成から、オノ次内裏造営期と期と同じくするものと考えられる。南北方向の築地は、現地形から判断して、オノ次内裏外郭を画する東西築地になるものとみられ、その内に造営された殿舎は、内裏内郭との位置関係からみて、平城宮の「華芳坊」にあたる一部に属するものと考えられる。従って A 期はオノ次内裏造営以前、C 期はそれ以後の造営といふことになる。

(口) 西半部

今回新たに検出された主な遺構は、建物 1 種、孤立柱列 1 、井戸 1 などである。

調査地域の南端には、オノ次内裏内郭北側を横う回廊の北側柱跡と、それに伴う雨落溝とが東西に走っている。これらは前年までに調査されたものの、東の延長部である。前行在回は約 4 田、凝灰岩の礎石を用つものである。これに伴なう雨落溝は凝灰岩切石作りである。これを前年発見したものより、延長である。その 3.5m 北に一茶の溝が調査地域の中央以西にある。幅約 1 田、南北 70 周ほどあり中央部で北方に屈曲し、約 20 周ほど北で、さらに北東に曲り、6AAO 地区東半部に達している。この溝は延長部で深くなる。これらの溝の北側は幅 3 田の築地痕跡が東西にあり、これも前年発見された築地の東延長部である。この築地の北側には、東半部に 4 田ほどの石敷きがある。

孤立柱 1 種のうち東西棟 6 棟、南北棟 4 棟である。二枚の建物は少なくとも 6 期に分けられる。

【工期】

I 期に属するものは、調査地域の中央部にあるア窗以上 × 5 间、

4面起付の東西棟である。柱間は前行・梁行ともに3間の等間で、この地区で最大の矩模のものである。この北側にある3間×2間の東西棟は、次の2端に属するものより柱間係において古いから、苏るいはこの端に属するかも知れない。2段は東西正面で、南北端を堵ち、往間可否は前行2.5m、梁行1.5mである。

〔2期〕

1期の述説の後よりに重なる3間×2間の南北棟がこの期に属する。柱間は前行・梁行とも2.4m。

〔3期〕

この期に属するものは11間×2間の南北棟で柱間は前行2.85m、梁行3.5mである。

〔4期〕

もつとも西端に近い3間×2間の東西棟で、柱間は前行2.4m、梁行2.7mである。最も期は下貢

〔6期〕

この期に属するものは調査地域の東よりに位置する2棟である。その一は3間×2間の南北棟で柱間は前行・梁行とも2.4mである。北から3間目に間仕切りがあるが、この間仕切りまでは南北に3.5m離れて柱穴が並ぶ。柱穴の大ささからみて、西棟とするには疑問もある。他の一は11間×2間の東西棟、南北付で柱間は梁間、前行とも2.85mである。この向左に共通することは建物の前面方向がやや西に傾いていることである。南北には立ち楓列も或いはこの端に属するものかも知れない。この類の建物の柱間は2.4mであることを考慮して、晴耕のさがるものであり最も新しいものであろう。

晴耕の不明のものは3棟ある。一は3間×2間の東西棟で、柱間は梁行、前行とともに2.5mである。他の3間×2間(?)の南北棟で柱間はこれを前行・梁間とも2.5mである。他の一は3間(?)×2間の南北棟である。柱間は前行が晴のうで南北の方で4.5mと算出でなく梁間は2.4mである。現在2面半でこれが分りますが、最初はさらに1間のびるものと思われる。

この地域の歴史半分は市延古墳の前方部をとりまく中約40mの周囲
の地盤であり、埋め立て、整地されたものである。

(3) 遺物

遺物は柱穴・土塗・磚・瓦・盛土などから絶対以前、木筒を始めとし、多量の瓦、土器、陶器・漆・鐵錐・木の呑製品・石子の自然遺物がある。

木筒

木筒は6AAO区の土底上6AAB区の土底のニヶ所で発見された。
まだ調査進行中であるが、すでに鉢片を合せて150点以上が発見さ
れた。その石子を別示す。

6AAO・土塗

「左衛士府」

「□□□□
建部益人」

「□□多紀園□□」

「(サダ)
伊田床足」

「刑部石次四口」

6AAB区土塗

表「□□櫛成新式伯庭官匠園 大御六束

表「□□中務少臣池田足膳」

「若狭園直敷郎藤人昌吉調三斗」

「園園園春豆郡謙島海郡□□」

「園園園佩戎郡□□御下主□□□□」

「風憲郡和泉郷伊祖坂」

表「阿波國板野郡井隈郷□□」

表「戸主海郡萬長江同郡□□」

「常陸國鹿島郡福麻御大聲」

「(佐々木)
四年國九月料御賀宇波加賀割六口」

「天平十九年七月廿三日」

木筒は6AAB・土塗出土のものでは前に天皇の御代の海鹽有關係の

もの、また6AA0上部出土のものは瓦割土席や人名記載のものが著しい。

瓦

全城から多量の瓦類、磚が採集されている。丸・平瓦・軒丸・軒瓦のほか窓枠も発見された。面瓦・斜面瓦では、中二次内製瓦窯の開用口に一組(6311-6664)が最も多く、また小型の軒丸・斜面瓦(6313-6685)が、6AAB区東端の築地の雨落溝から多く出土し築地にこれが用いられたことを示している。

なお6AA0区の木簡出土土塗の上層から縦軸を施した平瓦と1枚発見した。

土器

土師器、須恵器が主で、墨書きを有する土器もある。埴輪も取扱い出土土器としては一般陶器、环、皿、罐、壺、甕などが多く存在する。6AAQ区は遺構の性格上、土器は少いが、紅陶片より6AA0区の土塗、6AAB区、築地西側の地出土上色灰瓦で石器等に被せられた。6AAB区木簡出土の土塗から放出された土器片、併せて木筒から元平末年頃のものとして土器の断年的研究がなされ、その発達は大きいものがあろう。6AAB区の東の井戸からは墨書きのあるものが発見された。

「越太郎 炊せ取不得 透取番答五十七」

この墨書きは土師器杯の外側と意にあり土器標式上原安利期のものである。また改変の觸製円錐が検出されているが、うちに鳥形の頭と八花頭がある。

その他に器の冠の断片、毛しろ断片などが発見され、木製品ではヘラ、箸、曲物底部、木炭、タキ木などが検出されている。

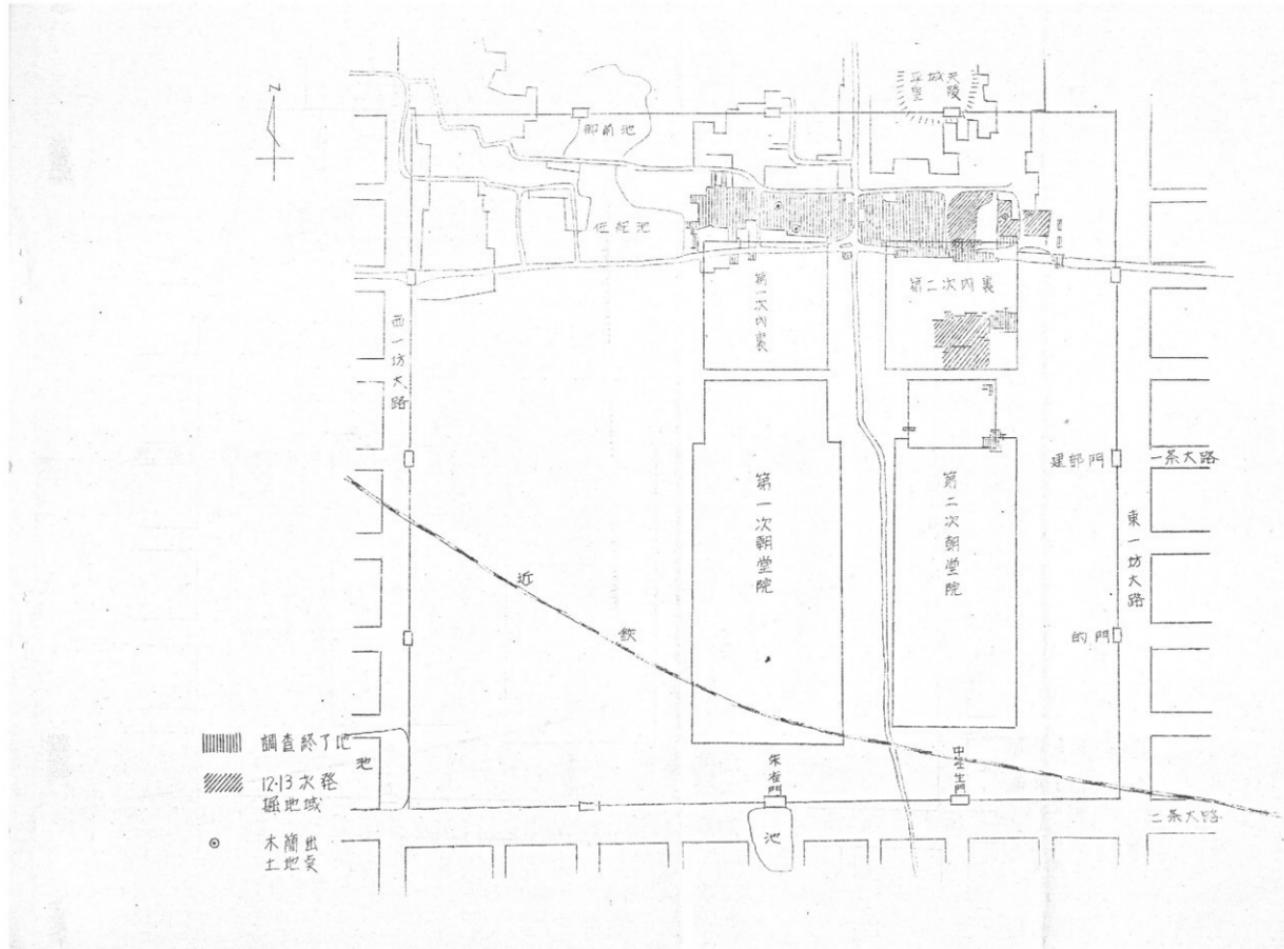
他自然遺物ではクルミ、琥珀、栗、瓜等の種子がある。

(ア)

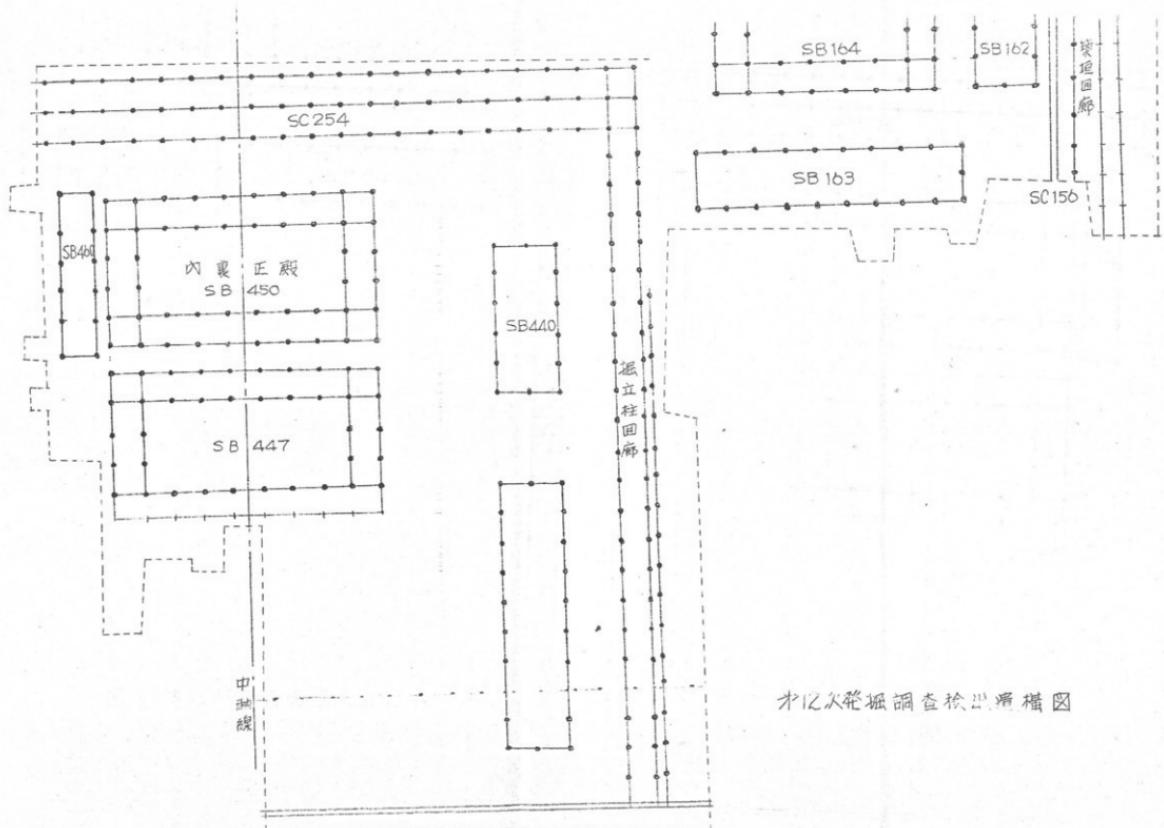
墓 [5期]

1期の遺物の頭よりに裏なきも向以上×3箇の東西標がこれに属す。南側付の遺物で、柱間は行間2.4m 頭行2.85mである。遺物の頭

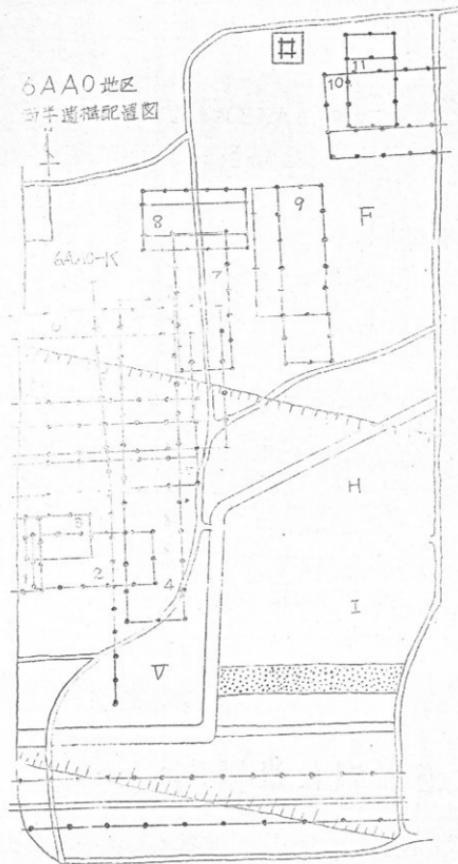
1mほどの所に雨落溝がある。これは1～4期のどれとも切り合はないので前後関係は明らかでない。ここに雨落溝と3期建物の関係から、3期以降のものと考えられる。



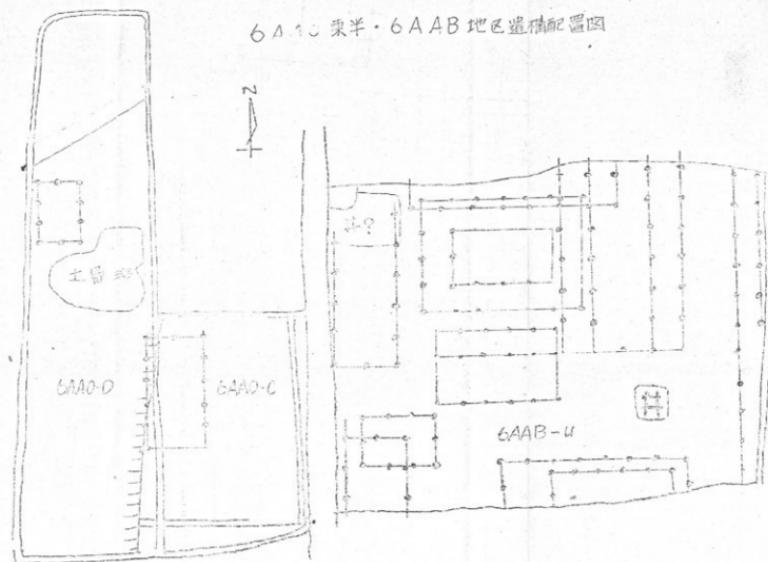
才化久花掘調査検出構図



6AAO地区
西半遺構配置図



6A1c 東半・6AAB地区遺構配置図



第13次発掘調査遺構配置図